

キリストのかたち(9) 栄光の望みなるキリスト

コロサイ3:1~4

キリストのかたちというテーマでみことばを学び続けています。今日は栄光の望みなるキリストと題してみことばが教えるキリストを見てゆきたいと思います。今日のみことばを理解するために私たちの想像力と信仰を目一杯働かせていただきたいと願っております。そしてキリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどのものであるかを味わいたいと思います。

1. 「天の窓」を通してキリストを見る

ギリシャ語で「人間」は「アンソロポス」といい、顔を上に向けるつまり「上を見る者」という意味があります。ちなみに文化人類学のことをアンソロポロジーと言いますね。他の動物は四足で、地面を見ながら歩きますが、人間は二本足で立ち、空を仰ぎます。人間と動物は見た目も違っていますが、なにより、内面が違います。人間が「上を見る」という場合、それは、よりよいものを求める「向上心」を指し、何よりも、この世界と人間を創造されたお方を見上げる「信仰心」を意味しています。

まことの神を知らなくても、多くの人は「天」の「意志」や「力」を感じながら生活しています。古代の人々も、地を照らす太陽と、天から降る雨が地に実りを与えることを知っていました。日照りが続けば作物は枯れ、雨が多すぎても収穫を得ることはできません。それで、人を生かす糧は地からとれるものですが、それを与えるのも、与えないのも天が決めるのだと感じていました。

詩篇121:1-2に「私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのか。私の助けは主から来る。天地を造られたお方から。」とあります。昔の日本人は、高い山を見上げると、その山のふもとに鳥居を立て、山そのものを拝みました。雨雲が山から湧き出て、田畑を潤す様子を見て、山を神々のひとつと考えたのです。しかし、まことの神を知っていたイスラエルの人々は、山の上に広がる天を見上げ、その天をも、山をも、地をも造ってくださった神を見上げました。山に雨や雪を降らせ、それが川となって野に流れ、草木を茂らせ、あらゆる生き物を生かし、人々を養いますが、それらすべては、神の人への恵み、あわれみによるのです。ですから人間らしい生き方というのは「上を見上げて」つまり天地万物の造り主なる神を意識して生きているということです。たとえ今、足らないものや苦しみがあったとしても、神は必ず必要なものを与えてくださる、苦しみ、悩みから救ってくださる。そのことを信じて、神に願い求めるなら、神は「天の窓」を開いて祝福を注いでくださいます。他の人よりも多くのものを持っていたら、知恵や知識が豊富であれば、強い力や権威があれば幸せな人生を過ごすことが出来るはず！そういったことは単なる自分の思い込みに過ぎなかったことに誰でも人生の中で気づかされるのが起きます。そして多くの心の問題はそういった時に起こってきます。「私の人生これからどうなるのだろう?」「神様は何も見ておられないのではないか?」等々 ですから家族や友人、知人に「神なる主イエス・キリストを信じ従っていれば大丈夫です」ということを教えてあげることが最高のプレゼントということになります。古代の教会では礼拝のことを「天の窓」と呼んでいました。礼拝を通して神が今日備えて下さった祝福と恵みを受けてこの週の歩みへと進んでゆきたいと思います。

2. 天におられるキリストと共に

さて、今日のコロサイ人への手紙は、3:1に、「こういうわけで、あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。」とあって、私たちが天を見上げるのは、そこにキリストがおられるからであると言っています。いや、キリストがそこにおられるだけでなく、私たちも、キリストと一緒にそこにいるのだと教えています。1節の「あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら」とは、神が、イエス・キリストを信じる者を、その罪とともにいったん葬り去り、罪を赦し、きよめ、よみがえらせてくださったことを言っています。これは、信じる者が神の子どもとして生まれかわること、「新生」(ブーン・アゲイン)と同じことです。ペテロ第一1:3にもこうあります。「私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちに新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。」

復活した者、新しく造られた者、神の子どもとして生まれかわった者、それが「クリスチャン」です。「クリスチャン」というと「キリストを信じる者」のことと考えられています。確かに、クリスチャンはキリストを信じる者です。神の御子が私たちの救い主となるため、人となって世に来られたこと、全人類の罪を背負い十字架で命を献げられたこと、十字架から三日目に復活されたこと、そして、今、天で父なる神の右の座について、そこで私たちのためにとりなしておられることを信じています。そう信じて、その信仰によって救われました。しかし、「クリスチャン」という言葉には、ほんらいは、「キリストにある者」、キリストと結ばれ、キリストとひとつにされた者という意味があります。ですから、キリストが十字架で死なれたとき私たちが死に、キリストが葬られたとき私たちが葬られ、キリストが復活されたとき私たちが復活し、キリストが天に帰られたとき、私たちが天に昇ったのです。エペソ 2:4-6 にこうあります。「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。」 「クリスチャン」とは、「キリストを信じる者」というだけでなく、「キリストにある者」であり、キリストとともに死に、キリストともによみがえった者なのです。

みなさんは、そのことを信じておられるでしょうか？ イエスが十字架で死なれたのが、私の罪のためであり、復活されたのが、私の救いのためであることさえ、信じるのに難しかったのに、じつは、私はイエスとともに死んだ者なのだ、イエスとともに復活した者なのだと思えるのは、簡単なことではありません。今、現に、この地上に生きている私がどうして、イエスとともに天の座にいるのか、そんなことは、想像さえできないことです。確かに、それは、五感で感じることはできません。しかし、信仰とは、目に見えないものを、神の言葉によって信じることです。天を見上げ、そこにおられるキリストを思うとき、私たちは、この真理を見ることが出来ます。

街に住んでいると難しいですが自然がそのままの所で夜を迎えると満天の星を見ることがあります。私は夜、砂漠のような所を車で走っていた時に夜空に輝く数えきれないぐらいの星を見て圧倒されたことがあります。きっと古代の人たちは夜になると、降ってくるような星空を眺めていたのでしょうかね。同じように天を見上げていても、昼と夜では天空は違って見えます。もちろん、だからといって、夜になって急に星が生まれるわけではありません。演劇のように「はい舞台は変わって夜の場面です」と言って代わるものでもありません。夜も昼も星はそこにあるのですが、昼は太陽の光のためそれが見えないだけです。夜になって太陽の光が遮られると、地球が無数の星に取り囲まれているという真実が見えてきます。信仰によってものごとを見るというのは、夜になって現れる星を見るようなものです。そこにあっても、今まで見えなかったものが、神の言葉と、聖霊の働きによって見えてくるということです。

天を仰いでキリストを見上げるとき、私たちはそこにおられるキリストを見るだけでなく、キリストとともにあり、キリストの内にある自分をも見るのです。過去の自分の姿ではなく、キリストにあって、罪を赦され、神の子どもとして愛され、新しくされている自分を見るのです。信仰によってキリストを受け入れても、キリストにある自分を発見することができず、自分を受け入れることができていない人もありますが、キリストにあって新しくされている自分を受け入れる者は、どんなに過去の自分に失望していたとしても、そのこだわりを捨てて、新しい歩みへと導かれるのです。

3. 天から来られるキリストと共に

私たちが上を見上げ、天を思うとき、そこにキリストとキリストにある自分を見るのですが、さらに素晴らしいことは、その天からイエス・キリストがもういちど、この世に来られることです。そのとき、すでに私たちはキリストにあって新しくされているのですが、それが完成するのです。

私たちは、神の御子が私たちの救い主となるため、人となって世に来られたこと、全人類の罪を背負い十字架で命を献げられたこと、十字架から三日目に復活されたこと、そして、今、天で父なる神の右の座について、そこで私たちのためにとりなしておられることを信じています。そればかりでなく、キリスト

が、天から再び地に來られることも信じています。これを「キリストの再臨」と言います。「キリストは死なれ、よみがえられ、再び來られる。」これは「信仰の奥義」と言われ、古くから礼拝で唱えられてきた言葉です。

多くの人が何となく感じておられると思いますが今日、世界は世の終わりに向かって急速に進んでいます。昨年、ジェレマイヤ牧師が "The World of the End" (終わりの世界) という本を出しました。先生は聖書の預言に基づいて、これからの世界が「欺き」の世界に、「戦争」の世界に、「災害」の世界に、「迫害」の世界に、「裏切り」の世界に、「不法」の世界に、「悪い知らせ」の世界に、「終わり」の世界になっていく。しかし、クリスチャンは「正直」であり、「落ち着いて」生活し、「確信」を失わず、「備え」をし、「忠実」で、「親切」で、「良い知らせ」を語り、「動かされない」者であれと勧めています。このような世界にあって聖書の言葉、特に「預言」は「希望」です。預言のことは単なる警告だけでなく、常に希望を語っています。キリストを信じない人にとって、これから起こることは「世の終わり」に導く絶望的なことであっても、キリストを信じる者には、それら一つひとつは「神の国の始まり」に導くものです。キリストを信じる者は、どんなときも希望を失くしません。世の人がこれが終わりだと思っている時が始まりなのです。

キリストが來られるとき、私たちはどうなるのでしょうか。コロサイ 3:4 に「あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。」とあります。これは、ヨハネ第一 3:2 では、こう言いかえられています。「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのかまだ明らかにされていません。しかし、私たちはキリストが現われたときに、キリストに似た者となることは知っています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」

コロサイ人への手紙をここまで読み進んでくると、コロサイ 1:27 の「この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです」という言葉の意味が分かってきます。キリストを信じる者は、「キリストにある者」ですから、キリストの内にいるのです。そして、それと同時に、キリストは信じる者の内におられ、その人を生かしておられるのです。キリストのいのちに生かされている者は成長し、キリストに似た者になっていきます。キリストだけを見ていれば良い！この成長、成熟のプロセスは、キリストが再び來られるとき完成します。その時、私たちはキリストと同じ、栄光の姿に変えられるのです。これが「栄光の望み」でなくて何でしょう。聖書は、たとえ困難な時代であっても、私たちが勝利して生きるための道筋をすでに作ってくれているのです。生きるにしても、死ぬにしても私たちはキリストのうちにあるので何も心配いらないのです。この「望み」、「希望」が、終わりの時代にも、私たちが支えます。人を絶望にしか導かない罪の生活から、神の愛と祝福を受け、希望に生きる生活へと導かれます。